

とこしえの王座

サムエル記下7章1～17節
2022年5月22日
松田 基子 師

神様は、愛を築き合う存在として創造された人間が、神様の愛を裏切り、ご自身に叛いた時、それは人類にとって、永遠の滅びへの道であることをご存知でしたから、叛いてもなお人間をお見捨てになる事は出来ませんでした。人類を愛された神様は、何としてでも人類を救いたいと願われ、世界の歴史を人類救済の歴史へと導かれました。その御計画が、歴史のなかにどのように、進められて来たのか、その事を記したのが聖書です。

聖書は、神様からの啓示を受けた人々によって伝えられ、記され、編纂されて来たものです。その人類の救済史の輪郭が見えて来たのは、神様の呼びかけに従ったアブラハムに対する神様の契約です。神様は創世記の12章1節、2節で、アブラハムに対して、

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように」

と招かれました。

この神様の招きに対して、アブラハムは、神様に全信頼して、従いました。その結果神様は創世記17章7節で、

「わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫との神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンの全ての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。

わたしは彼らの神となる」

と約束されました。此処に神様は、ご自身に従ったアブラハムと、その子孫を用いて、人類救済の御計画を進めることをお決めになりました。しかし、それは、具体的にはどう言うことなのか、直ぐに明らかにはされませんでした。長いながい年月を掛けて、徐々に徐々に明らかになって

行きました。

アブラハムの子孫は孫のヤコブにイスラエル(その意味は、神が支配するもの)の名前が与えられた事により、イスラエル人と呼ばれました。そのイスラエル人は、アブラハムから4～500年後、エジプトの地で、数を増してはいましたが、エジプトの奴隷の身となっていました。彼らは苦役に苦しんでいました。

神様は彼らの叫びを聞くと、モーセを指導者に立ててエジプトから救出し、

「彼らをご自身の民とする」

と言う、契約を結ばれました。その事についてモーセは、申命記7章6節から、

「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する、主の愛のゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導きだし、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである」

と言って、

『神様の一方的な愛と憐れみによって、選ばれたのであるから、それに答えて神様に従って行かなければならない』

と教えました。

カナンに定住して約200年後、紀元前千年頃の事です。カナン地方には、先住民の都市国家があり、地中海側からは、海から侵入してきた先進的なペリシテ人がおりました。イスラエルはその中で、戦い抜いて行かなければなりませんでした。神様は十戒の中で、

『殺しては成らない』

と命じられているにも拘わらず、戦いの時代がずっと続きます。神様は決して力で人間を従わせられる事はなさいません。人間自身に、戦いの愚かさを悟り、共に生きる道を築いていく責任があるのです。そのために人類は長い歴史を歩みながら、なお、悟れないその罪深さが、そこにはあります。

さて、イスラエルは、
『自分たちの真の支配者は、主なる神様である事、自分たちは主なる神様の民である事』
を、周りに証して行くために、神様に選ばれた民でありましたが、現実のペリシテ軍や周辺諸国の軍事力に恐れを成して、

『自分達にも他の国々と同じ様に、
王を与えて欲しい』
と求めました。神様は不本意ながら、民の願いを聞き入れ、サウルを選んで、彼をイスラエルの最初の王に立てられました。しかし、サウルは、神様の御心を尋ね求め、聞き従う事はしませんでした。

そんなサウルでは、神様の人類救済計画を担う事は出来ません。神様は御心に適う人物を捜されました。それが、ダビデでした。彼は神様に絶対的な信頼を置いていました。神様は、預言者サムエルに命じて、ダビデに、神様から選ばれた者の徴(しるし)である、油を注がれました。ダビデはサウル王に取り立てられました。しかし、サウル王は、民衆の称賛が自分を超えて、ダビデに注がれることに、激しく嫉妬して、ダビデの命を狙いました。

ダビデは、サウルの手から逃れる為には、ペリシテ人の地に逃れる以外にありませんでした。一方サウルは、遂にペリシテ人との戦いに敗れ、命果ててしまいました。ダビデはサウルに対して、最後まで、

『主が油注がれた器である』
と言う尊厳を失うことなく、彼の死を悼みました。その後、神様に導きを求め、自分の部族であるユダのヘブロンに帰りました。そこでユダの人々はダビデに油を注いで、ユダの王としました。一方サウル亡き後、サウル軍の司令官アブネルは、サウルの子イシュ・ボシエトを擁立して、サウル王家の存続を図りました。以後7年半にも亘って、両軍は同胞でありながら、争い合う無益な時代が続きました。

サウル軍の司令官アブネルはダビデに、イスラエル統一を持ちかけました。話しが成立したにも拘わらず、その場にいなかったダビデ軍の司令官ヨアブは、帰途についていたアブネ

ルを追って、弟の仇と言う事もあって、アブネルを、殺害してしまいました。サウル家のイシュ・ボシエトも、二人の略奪隊長に殺され、サウル王家は滅んでしまいました。そこで、イスラエルの全家は、ダビデに油を注いで、ダビデを全イスラエルの王としました。王位に就いたダビデは、難攻不落とされていた、エブス人のエルサレム攻略を図り、これを征服して、ダビデの町と命名し、そこに王宮を建てました。

ダビデは愈々力を増して、ペリシテ軍の内陸部への侵攻を抑え、イスラエルに平和が訪れました。ダビデは神様の導きと助けでイスラエルの平和が与えられた事を悟り、神様に感謝せずには居られませんでした。そこでダビデが願った事は、神様の臨在、支配の象徴である、神の箱をエルサレムに移して、エルサレムを神の都とする事でした。神の箱はモーセに率いられて、荒野の旅をしてきたイスラエルに、神様の臨在を現すものでした。天幕の中に置かれ、モーセはそこで神様に祈りを献げ、導きを求めましたから、その天幕は、臨在の幕屋、あるいは、会見の幕屋と呼ばれました。

イスラエルがカナンに定住してから、神の箱はギルガル、エバル、シェケム、ベテル、シロと言った所に置かれていましたが、シロに置かれていた時、ペリシテ人との戦いに、神の箱を持出し、ペリシテ人に奪われてしまいました。ところが、彼らに災いが降ったのです。そのために神の箱はイスラエルに返され、キルアト・エアリムのアビナダブの家に置かれました。その時から約70年位が経っていたであろうと言われています。ダビデはその神の箱を、エルサレムに運び上げる計画を立て、精鋭3万の兵と、楽隊を整えて、神の箱のエルサレム移動を開始したのですが、途中牛がよろめいたために、ウザは神の箱を手で押さえてしまいました。この行為は、

「神聖な物に乱りに、手を触れては成らない」
に、違反する行為でした。そのためにウザは死んでしまいました。

ダビデはこの状況に、神の箱を自分の許に移さず、ガト人、オベド・エドムの家に置いたのでした。ところが神様は彼の一家を大いに祝福されたのです。それを聞いたダビデは、神の箱

を自分の許に置くために、今度は荒れ野の移動に倣い、担いで運びました。ダビデは、歓喜に溢れて、神の箱をエルサレムに備えた、天幕の中に安置しました。ダビデは満ち足り、平穏な日々を過ごす中で、ふと考えました。

サムエル記下7章1節から、
「王は王宮に住むようになり、主は周囲の敵を全て退けて、彼に安らぎをお与えになった。王は預言者ナタンに言った。
『見なさい。わたしはレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ』」

とあります。ダビデは、自分に王位を与え周囲の敵に打ち勝たせ、平和を保たせて下さっているのは、他ならぬ主なる神様であることを忘れる事はありませんでした。神様からの祝福を思うと

『自分は高価なレバノン杉で立てた贅沢な王宮に、温々と過ごして居るのに、その与え主である神様の臨在を現す神の箱は、幕屋に置かれて居る』

ことに、神様に対する申し訳なさが、こみ上げて来たのです。ダビデは、

『神様の御名が讃えられる、神様の箱を置くに相応しい、神殿を建てなければ、神様に申し訳ない。神殿を建てたい』

と言う願いが心の中に強く起こってきました。

ダビデは早速、預言者ナタンを呼んで、その計画を打ち明けたのです。ナタンも嬉しかったのでしよう。彼は同意して、

「心にあることは何でも実行なさるとよいでしょう。主はあなたと共におられます」

と後押ししました。ところがその夜、神様はナタンに臨まれました。7章5節からその内容が記されています。

「わたしの僕ダビデのもとに行って告げよ。
『主はこう言われる。あなたがわたしのために、住むべき家を建てようというのか。わたしはイスラエルの子らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた。わたしはイスラエルの子らと常に共に歩んで来たが、その間、わたしの民イスラエルを牧するようにと命じたイスラエルの部族の一つにでも、なぜわた

しのためにレバノン杉の家を建てないのかと言ったことがあるか』」

と問われたのです。

神様のダビデに対する答えはどこまでも、神様が主権者であられるという宣言です。ご自身の自由で幕屋の建設を命じ、民と共に歩む事を、ご自身が求められたのです。神様の自由と尊厳を何人と誰も(いえども)侵しては成らないのです。しかし、神様は、精一杯の心をもって神様を愛し、敬うダビデの心を喜ばれました。神様は名もない、一介の羊飼いでしかなかったダビデを、その少年の頃、神様への絶対的信頼の故に選び、イスラエルの指導者に育て、遂には王位を与えられました。

9節には、

「あなたがたがどこに行こうとも、わたしは共にいて、あなたの行く手から敵をことごとく断ち、地上の大いなる者に並ぶ名声を与えよう」

と言っておられます。そして、

『イスラエルをこの地に定住させ、士師の時代からイスラエルを脅かしてきた敵をわたしは全て退けて、あなたに安らぎを与える』

と言っておられます。

神様は既に、その恵をダビデにお与えになっていました。その事だけでも、ダビデは神様に愛され、祝されて居ることが分かりますが、神様はご自身を愛し信頼する者を更に愛されるという事が、ダビデを通して解ります。11節の終わりに、

「主はあなたに告げる。

主があなたのために家を興す」

との宣言です。神様を愛し、敬う故に

『神の箱を置く、立派な家を建てたいと申し入れたダビデに対して、いやいやわたしがあなたの家を建てる。』

つまり、

『家を興す、ダビデ王朝を興す』

と、ダビデに、分に過ぎた祝福を、お与えになるというのです。

12節から、

「あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、

あなたの身から出る子孫に後を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をどこしえに堅く据える」とあります。これはつまり、

『王位を世襲とする』と言う約束です。』
神様はこれまで、ご自身に従ったアブラハムを選び、その子孫をご自身の御計画に導かれるために、指導者を選ばれましたが、アブラハム、イサク、ヤコブ以降は、その個人一代限りでした。ダビデによって、神様の御計画は新しい段階を迎えました。神様はこれまで、選ばれても、神様に従わなければ退けられました。ところが、ダビデに対しては、

『彼の子どもに王位を継がせる。』
その者が神様のために神殿を建てる事を許し、それと共に、14節には、
「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が過ちを犯すときは、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう」と言っておられます。

神様はダビデの子孫が、御心に適わない時、
『懲らしめる事はあっても、決して見捨てる事はしない』
という約束です。

『サウルから慈しみを取り去ったが、その様な事はしない』
と言って下さっています。必ず約束を実現される神様は、16節に、

「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手に、どこしえに続き、あなたの王座は、どこしえに堅く据えられる」と約束されました。果たして、ダビデ王朝の王位継承者達はどうかだったのでしょうか。その多くは、神様に従わず、道を逸れた為に、神様はバビロン捕囚に渡され、人の目にはダビデ王朝は滅亡してしまいました。

しかし、神様は後代の預言者達を通して、ダビデの子孫から、メシアが生まれる事を、預言されました。そこでイスラエルの民は、ダビデの子孫からダビデの様に強いメシア、救い主が現れると思ひ込んで待ち望みました。しかし、神様の御計画は、ダビデの子孫、その系譜に神の御子イエス・キリストを誕生させて、人類の

罪を贖い、救われるという、
『人智を超えた人類救済の御計画』
でした。アブラハムに、
『祝福の源になる』
と言われた、その預言はイエス・キリストに於いて成就したのです。

ダビデは、神様に全信頼し、心から敬い、愛した事によって、この大きな恵を受けたのです。ダビデのこの生き方から、神様が、私達に求めておられるのは、
『神様に、絶対的信頼を置き、真心を込めて愛し、従う事だ』
と言う事が解ります。

神様はその様な人を用いて、ご自身の御計画を進めて行かれるのです。私達がこの地上に生かされているのはそのためです。私達は特別な事が出来なくても、神様に全信頼し、神様を心から愛し、神様に従って行きましょう。そして、隣人に対して、人類の真の救い主はイエス・キリストであることを証して行きましょう。

お祈りをいたします。
天の父なる神様

あなた様は罪深い私たちを、永遠の滅びから救うために、世界の歴史を、人類救済に定め、御子イエス・キリストを誕生させて、人類の罪を贖わせ、救いの道を開いて下さったことに、唯々驚き、感謝する者です。

イエス・キリストが御救いを完成して下さった今、私達は愈々神様に全信頼し、愛し、従い、イエス・キリストによる御救いを隣人に証して行く者と成らせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。 アーメン。